

可哀想に思えた。

日本帰還が待ち遠しく、毎日毎日、何々部隊が帰るとかのニュースを聞く。自分たちの部隊はいつごろかと、毎晩椰子の葉の上に輝く大空の美しい星や月を眺めながら故郷のこと、親や妻子や親戚のことなどを思い浮かべた。

遠く海を越え、シンガポールに来て三年、ゴムの木が秋のように枯葉となり、また春のように新芽が出て青葉が繁るといふ、霜が降りなくても四季があるように素晴らしい現実を教えられた。

また、毒蛇やサソリ、海蛇、南方の珍しい動物に遭遇したが、今元気でいることを感謝しながら乗船命令を待っていた。とても永く感じていた。

昭和二十二年八月に入り、内地帰還命令が出た。みんなで万歳万歳で喜び、手製のリュックサックに（捕虜生活の中で作った）手持ち品を詰め込んだ。乗船は何日だったかは忘れた。佐世保に着く前に船上より内地が見えた時は、感激で胸がいっぱいになった。

佐世保より豊橋、伊那、実家へと夢中で歩き、家に着いた。

## 仏領印度支那 軍紀厳正 討部隊

長野県 中村正直

私は大正十一年九月生まれで、入営は十八年四月一日で、松本の東部五十部隊、現役で入営しました。

留守宅の方は父母や兄たちがいたし、独身者で体も良かったので、心配なく軍務に精を出せるだろうと思って、覚悟を固めていました。

入隊してから、船便の関係で三か月間内地で教育を受け、七月初ろ宇品港を出帆して台湾の高雄港で一週間ほど待機、もうそのころになると、米軍の潜水艦の攻撃が盛んになったのか情報を見て出帆しようです。我々も対潜、対空監視をしながら不安のうちに仏印のサイゴンに上陸した。ここは、小パリといわれるぐらいフランス風の都会だそうです。

私は第二十一師団歩兵第六二連隊要員で、連隊本部はビンエンにあって、そこで教育をやり直されました。仏

印の治安が良かったのは、日本軍の軍紀が厳しく、現地の人でもフランスの植民地だったので、それを日本が開放したと思っっている人が多くて、余りテロや攻撃が少なかったのです。

教育訓練のうち一番印象に残っているのは、工兵隊と協同の夜襲、渡河作戦訓練だった。一か月ぐらい毎晩続けられました。それは河の向こうにフランスの連隊があつて、それを夜襲する目的だったと思います。

私は若い兵隊だったので、細かい月日や地名、場所をはっきり思い出せないのですが、歴戦の古兵で他の作戦や戦闘を経験している人が、明号作戦は凄い戦闘だといっていたことを覚えている。

私も本当に、一番激しいと思った。弾丸が雨霰と撃ってくる中を突撃した。山を越えて田圃、また山を越えて突撃。大隊砲や重機関銃を集中、一斉射撃する。最後には中隊長が抜刀して突撃する。弾雨の中、弾着がわかる。足元の土がパッパッと跳ぶ。弾が耳をかすめる。弾を受けた人がバタッと倒れる。戦死する人、負傷する人、数多くの人が倒れている。

その人たちを収容にいくが、本当に悲惨な状況を見た。私は家のことや、死ぬことなどぜんぜん思わなかった。戦闘中とはそういうもので、怖い、恐ろしいなど考えている暇はないですよね。今思えば異常神経になるわけでしょう。私は将校の伝令を二か年したが、隊長に可愛がってもらった。フランス軍は高地に陣地を敷いて乱射乱撃だった。向こうも命がけだし、フランスの名誉のためにも簡単に降服出来なかつたろう。私は初年兵で、こんな戦闘は始めての経験だったので、無我夢中だったわけだが、死んで倒れる戦友や古兵の姿が今でも目に浮かんできませんね。

フランス軍を降服させ、軍や政府の施設を占領したり接收したが、現地住民は協力的でした。長い間、フランス人の植民地となって、屈辱的な圧政に苦しんだ場合もあつたらうから、日本軍が開放したお陰で自由になつたと思う人も多かつたし、安南軍は日本軍の補兵ともなつて協力していたのです。

討部隊は、仏印に永く駐留していて、その間、住民に

対しての軍紀は厳しく、万一、不法をする場合は、軍法会議にかけるなど嚴重に処罰された。こんなことから帰るときには涙を流して、またせひ来てくれと言って分かれた人たちが多かったです。

また、思い出すことは、昭和二十一年正月ごろ、中国国境を通過して入ってきた支那派遣軍の人たちの姿だったです。私はビンエン病院の歩哨に立っていたとき、広い舗装道路、ハノイへ行く道だが、そこを軍服はポロポロ、口を開けた靴、支那靴、草鞋履き、あわれな姿だった。これからタイまで行くのだろうと思った。同じ日本軍として大変だ、可哀想だと身にしみて気の毒に思った。私たちは、昭和二十一年四月二十八日浦賀港へ上陸し復員したのです。

## バターン死の行進

滋賀県

川並藤一  
伴 八三

第十六師団（垣兵団）を語る場合、垣兵団はレイテ島で玉碎しているので当時のレイテ戦を語る者はいない。わずかにサマール島に配備された者のうち一握りの兵隊が生き残っているに過ぎない。レイテ戦の模様、サマール島の戦況については垣兵団生残りの戦友たちが編集した「吾等かく戦えり」（垣兵団）に掲載されている。私はレイテ戦までに復員したので現在もお生命を保っているが、もし私がレイテ戦に参加していたら死んでいるはずである。命を持って帰ったことだけでも有難いと思っている。

私は昭和十七年三月一日第一補充兵として第二回目の召集を受け、敦賀歩兵第九連隊に入隊（第一回目の召集は昭和十二年九月一日京都伏見の連隊に入隊し支那事变